

【聖書】

ルカによる福音書 22:14 時刻になったので、イエスは食事の席に着かれたが、使徒たちも一緒だった。

15 イエスは言われた。「苦しみを受ける前に、あなたがたと共にこの過越の食事をしたいと、わたしは切に願っていた。16 言うておくが、神の国で過越が成し遂げられるまで、わたしは決してこの過越の食事をとることはない。」17 そして、イエスは杯を取り上げ、感謝の祈りを唱えてから言われた。「これを取り、互いに回して飲みなさい。18 言うておくが、神の国が来るまで、わたしは今後ぶどうの実から作ったものを飲むことは決してあるまい。」

19 それから、イエスはパンを取り、感謝の祈りを唱えて、それを裂き、使徒たちに与えて言われた。「これは、あなたがたのために与えられるわたしの体である。わたしの記念としてこのように行いなさい。」20 食事を終えてから、杯も同じようにして言われた。「この杯は、あなたがたのために流される、わたしの血による新しい契約である。」

21 しかし、見よ、わたしを裏切る者が、わたしと一緒に手を食卓に置いている。22 人の子は、定められたとおりに去って行く。だが、人の子を裏切るその者は不幸だ。」23 そこで使徒たちは、自分たちのうち、いったいだれが、そんなことをしようとしているのかと互いに議論をし始めた。

## 1 聖餐式

先週の礼拝後、2021年度教会総会を開き、今まで長い間、年間六回であった聖餐式を増やすこと、イースター、ペンテコステ、クリスマスの三大祝祭に加え、毎月第一日曜日の礼拝でも聖餐式を執り行うこととしました。2021年度は、十四回の聖餐式に与ることとなります。そして、今日が増やした聖餐式の最初、五月の第一日曜日であり、今日の聖書テキストは、ルカによる福音書で主イエスが聖餐を定めた場面。前もって、「5月の第一週にここが来るように」と調整していたわけではないので、不思議なめぐり合わせを感じます。教会の聖餐の起源となったのは、今から2000年前、主イエスが十字架に架かる前の晩の食卓でした。最初の聖餐式に満ち溢れる主イエスの思いへと深く心を集めたい、そして今日の聖餐式に新たなる気持ちで与ることを願います。

## 2 主イエスの熱望により実現

歴史上最初の聖餐式は、次のように始まります。「時刻になったので、イエスは食事の席に着かれたが、使徒たちも一緒だった。」時刻とは、日没の頃、夕方の六時位ではなかったか、と言われていました。「使徒たちも一緒だった」とあります。今までであれば、「弟子たち」と記す所を、この福音書をまとめたルカは、わざわざ「使徒」という言葉を使っています。使徒とは、主イエスがまだガリラヤにいた頃、大勢の弟子の中から祈りに祈って選んだ十二人の弟子達。後に教会の指導者となった者たちです。古代教会の人々は聖餐に臨む度、「今、自分達が与ろうとしている聖餐を取り仕切っているあなた方は、主イエスと最後の食事を共にしている方、主の手からパンと杯を受けた人だ」、そんな特別な想いを抱いていたのではないかと想像します。

主イエスと使徒達がついたのは、過越の食事。その由来は、旧約聖書の出エジプト記12章に詳細に記されています。紀元前1300年前、イスラエルの人々は、エジプト帝国で、「ヘブライ人」と呼ばれていました。「奴隷」という意味を持つそうです。その名の通り、奴隷としてこき使われていましたが、それだけではありません。ひどい迫害を受けているのに、どんどん増えていくヘブライ人を恐れたエジプト帝国は、「ヘブライ人の男の赤ん坊は殺さねばならない」という命令まで出しました。まさにイスラエルは、民族滅亡の危機にあり、人々は天の御神に向かって助けを叫び求めました。

そんな痛切な叫びを聞かれた御神は、「天を傾けて降って来た」と聖書は記します。そして、指導者モーセを立て、エジプトの皇帝ファラオに、ヘブライ人を解放するように、との交渉に当たさせます。しかし、労働力である奴隷をエジプト帝国がやすやすと解放する筈もありません。御神は、エジプトに数々の災いを下されます。災いがくだった直後、ファラオは「ヘブライ人を解放する」と約束するのですが、災いが収まると、「やはり、やめた」と取り消します。そういう事が十回近く続いた果てに、遂に御神は、「エジプト中のファラオの初子から奴隷の初子、家畜の初子まで、撃つ」という決断を下されます。初子とは最初に生まれた子供です。ヘブライ人を迫害し、男の赤ん坊の命を奪ってきたファラオ達の深い罪に対して、神の厳しい審きが降ろうとしています。人の罪をここまで審く権利があるのは、人ではなく、命の造り主である天の御神だ、と聖書は語ります。

しかし、その審きの中にあって、「イスラエルの人々の初子を撃つ事がないように」と主なる神はモーセに次のように命じます。「目印として、小羊をほふり、その血を家の戸口の、鴨居と二本の柱に塗りなさい。小羊の血の

印のある家の初子を撃つ事はしない。」神の審きは、小羊の血の印がある家を通り過ぎていく、過ぎ越していく、と神はおっしゃったのです。果たしてその通りになりました。エジプト中の家から叫び声が上がった夜、ヘブライ人の家では、人も家畜もその初子が命を落とす事はありませんでした。ファラオは、この様子を目にし、「これ以上ヘブライ人を拘束しておけば、エジプトは滅びる！」と、モーセ達に「ヘブライ人を引き連れて、今すぐ、エジプトから出て行け」と命じます。こうして、過越の夜、審きの夜を通り抜け、イスラエルの人々は奴隷の身分から解放されたと聖書は伝えます。神は、イスラエルの人々に、この過越の夜を忘れないように、と、過越祭を定められました。その過越祭の中心は、犠牲の小羊の肉と、酵母が入っていないパンを中心とした過越の食事です。家族でその食事をとることが祭りの中心でした。あの神の審きがエジプト中を駆け巡っていた夜、自分たちは罪を問われる事なく過ぎ越された、罪の赦しが与えられた、その神の慈しみを決して忘れない為の食事でした。

それから1300年近い歳月が流れ、小羊の血によって罪が赦されたことを心に刻む過越の祭りの食卓を、主イエスは使徒達と共に囲んでいます。主は言われます。「**苦しみを受ける前に、あなたがたと共にこの過越の食事をしたいと、わたしは切に願っていた。**」苦しみとあるギリシャ語は、パスコー、一方、「過越」のギリシャ語は、パスカ、非常によく似た単語です。この言葉からも、主イエスは、「私こそ、過越の犠牲の小羊、神に捧げられる小羊である」と仰っておられるようです。神は、罪の赦しを得させる為に、イエスを犠牲の小羊として選ばれました。イエスこそ、神の独り子であるから。1300年の昔、天の御神は、エジプトの民の罪の故に、彼らの初子を裁かれた。そして、1300年後のこの夜、同じ御神は、全ての人の罪の故に、ご自身の独り子を滅ぼそうとされています。勿論、天の御神に罪があるわけではないし、独り子である方に罪があるわけでもありません。全て、私ども人間の背きの罪が赦される為、天の御神と共に生きることができるようになる為です。間近に迫った主の苦しみの十字架は、私どもの罪を何としてでも見過ごし赦し救いたい、という新しい過越でした。

主イエスが使徒達と共についた食卓は、そんな主イエスの弟子たちへの熱い想いがこもった過越の食卓でありました。それは、主の言葉からもわかります。「**苦しみを受ける前に、あなたがたと共にこの過越の食事をしたいと、わたしは切に願っていた。**」この「切に願っていた」を直訳すると、「私は、願望を切に願っていた」です。これだけでも非常に強く願った様子が表れていますが、更に、「願望」なる言葉は、「欲望」とも訳される単語。主の抑えることができない、吹き出すような強い想いを表しており、ここを「願いに

願いに願った」と訳す人もいます。何としてでも、十字架に架かる前に、弟子たち共に過越の食事をしたい、主イエスの熱い思いが言葉となって、ほとぼしり出ています。

ですから、私どもが、外部の方々から、「何故、聖餐を祝うのですか？」と聞かれたとすれば、答えはただ一つです。それは、「私どもの主、イエス・キリストが強く強く願いに願いに願ったから。」それ以外の理由はありません。主イエスのその強い願は、代々の教会を経て、私どもにも伝えられています。今から私どもが聖餐を祝うのも、主イエス・キリストが、願いに願いに願ってくださったからです。

### 3 新しい契約

主は続けます。「言うておくが、神の国で過越が成し遂げられるまで、わたしは決してこの過越の食事をとることはない。」またぶどう酒をとって感謝の祈りを捧げた後に、言われます。「言うておくが、神の国が来るまで、わたしは今後ぶどうの実から作ったものを飲むことは決してあるまい。」

「神の国が来るまで」つまり、「神の国が完成するまで」と、「神の国で過越が成し遂げられるまで」は同じことだと考えられます。過越とは、神の審きとその中で与えられる赦し、それも「神の国で成し遂げられる過越」ですから、最終的な審きと救いが起こる終わりの日の事を主は仰っています。

勿論、これは明日に迫った十字架での死を予告しておられる、別離の言葉と聞くことができます。そして、別離の予告であると同時に、「私の明日の苦しみの死は、決して死で終わりはしない。必ず終わりの日に過越の食事を共にする時が来る」との約束でもあるのです。最終的な審きと救いが成し遂げられた時、主イエスは、ご自身を信じる者たちと盛大な祝いの席につく、喜びの食卓に着く、と仰っておられます。ですから、この主の聖餐の食卓は、主イエスの贖いの死を示すと同時に、救いが完成した日をも映し出している、という事ができます。

それは、礼拝も同じです。前にも語りましたが、私どもの献げる日曜日の礼拝こそ、終わりの日の礼拝、神のみ前に出る永遠の朝を映し出しているのです。私どもは、終わりの日、全ての命の造り主、全知全能の神、唯一の審き主である神のみ前に、立たねばならない者達です。私どもが礼拝している天の御神は、私どもを最終的に審く権利をお持ちの唯一の方、滅ぼす事のできる唯一の方。

ですが、滅ぼすことができる方こそ、真に救うことができになる方。神のみ前に、審きを受ける身として恐れおののきつつ、「憐れみたまえ」と祈

りつつ立つ時、罪人の私よりも遥かに深くぬかずく主イエスを、私どもは見るでしょう。人の罪を圧倒する愛をもって、主イエスが、天の御神と私どもの間に立ってくださる。自分を誇る事など到底出来ない所、自分を小さくするしかない所に私どもは立たされる、しかし、そこにイエス・キリストがおられます。そこで、私どもを愛するが故に、ご自身の命を引換にとりなしてくださるイエス・キリストの声を聞く。この声を聞いた者は、神を喜び、自分を喜び、隣人を喜ばざるを得なくなる、そのような主の愛の声です。終わりの審きの日、ですが、審きの日であるからこそ、恵みの日、救いの日。その日を、私どもは、今、先立って経験していると言えます。礼拝で審きの言葉により打ち砕かれ、赦しの言葉により、神のみ前に新たにされる。いわば、終わりの日に神のみ前に出るリハーサルを、私どもは、今、行っていると言ってもよいのです。

そのように、終わりの日の礼拝を重ねる神の民を、主イエスは、「必ず救い出し共に神の国での祝いの食卓に連ならせる」と、約束してくださっています。その主の約束が、20節「わたしの血による新しい契約」です。聖書で、「血」と言えば、その人の命をさします。主イエスは、ご自身を信じる者を必ず救う、と約束され、ご自身の命をその約束の証とされました。この主の約束を心に刻み続けなさい。それが、19節、20節で定められた主イエスの聖餐式です。主はご自身の血で、私どもとの新しい救いの契約にサインをし、印章を押すと言ってくださいました。私どもが聖餐式で与る葡萄汁は、まさに主の血の証です。この主イエスの想いは、決して軽く考えてよいものではありません。私どもは、神への恐れを忘れてはなりません。天地万物を造られた全知全能の御神への恐れのない所には、イエス・キリストはおらず、私どもの救いもないでしょう。

#### 4 聖餐は使徒的教会をつくる

先ほど、聖餐は、終わりの日の喜びの食卓を映し出している、と申しあげました。しかし、まだ完成された救いの日は来ていません。神の国は完成してはいないのです。主イエスの最初の聖餐式も同じでした。21節。「しかし、見よ、わたしを裏切る者が、わたしと一緒に手を食卓に置いている。」サタンに入れ、主イエスを祭司長たちや律法学者達に引き渡そうとして機会を窺っているイスカリオテのユダ。彼もまた、同じ食卓に主と共にいました。21節のように主イエスは、ユダの裏切りを知っていたのですから、彼だけ、食卓から締め出すこともできた筈。しかし、主はそうならなかった。主イエスは、いつもそうでした。律法学者やファリサイ派の人々が忌み嫌う

徴税人達や神の律法を守ろうとしない罪人達、娼婦達と食卓を共にしてきました。その食卓で主は、彼らを悔い改めへと導いたのです。主イエスはここでもそれを貫かれた。終わりの日の審きとご自身の十字架を示し、イスカリオテのユダをなんとか悔い改めさせようとされています。22節の「人の子は、定められたとおりに去って行く。だが、人の子を裏切るその者は不幸だ。」という言葉は、主イエスの切なるユダへの呼びかけです。最後の「不幸だ」という部分は、「その人が不幸だから、私の胸はかきむしられるほど辛い」という強い嘆き悲しみを示す言葉です。イエスは必死でユダにご自身のもとに戻るようと、呼びかけておられるのです。

そんな最初の聖餐式の様子を見ても、これこそ、まさに教会の姿である、と思います。そう、教会は、同好会でもサロンでもない、イエス・キリストが、ご自身の食卓に招いた罪人達が集まる所。主イエスを裏切りかねない一人一人が、主イエスの体と血、命をいただき、罪の赦しを得る所。主の情熱によって罪赦され、神の子とされる救いの約束に顔をあげ、終わりの日の希望に生かされる所、それが教会です。

もう、二十年以上前に聞いた山瀬まみさんというタレントの言葉が印章深く残っています。インタビューで「結婚生活はどうですか？」と問いかけられた彼女は、こう答えました。「私は料理が好きで殆ど毎日作っています。夫はもう何年間も、それを食べている。だから、多分、彼の体の1/4位は、私がつくった料理でできていると思うと愉快です。」「なるほど、人の体は、毎日の食べ物でできているんだなあ」と当たり前のことを気づかされました。そして、「食べる物が体をつくる」というのは、物質的な肉体と食物だけのことではないと思います。私どもの為に裂かれたイエス・キリストの体と血を食べて飲み出来上がる体こそ、キリストの体なる教会です。そして、私どもの為に裂かれたイエスの体の一部と流されたイエス・キリストの血の一部が、イエス・キリストの体なる教会の一部である私ども一人一人を造り上げていくのです。ですから、主イエスの礼拝と聖餐こそ、教会を作り上げ、保っていると言っても過言ではないのです。

そのような意味もあって、この福音書をまとめたルカは、最初の聖餐式に参加した者達を、「弟子たち」とはせず、「使徒達」としたのだと思います。使徒達は、主イエスに選ばれて集められ、使命を与えられて、この世に遣わされた一人一人だからです。そして、主イエスが十字架と復活の後、天の父なる神のみもとに帰られた後は、ほうぼうで興った教会の柱となった人たち。今日の聖書テキストに出てくる「使徒たち」とは、「教会」と読み替えることもできるのだと思います。

## 5 私どもの将来

さて、ある神学者がこう言いました。「イエス・キリストを信じる者には、将来がある」と。「未だ来らない」未来ではありません、「将に来たりつつある」という「将来」が私どもキリスト者にはある、と言う。私もそう思います。では、私どもの将来とはどのようなものでしょうか。

神の国で救いが成就される終わりの日、主イエスと共に宴に連なるという「将来」です。私どもが勝手に言っているのではなく、主ご自身がその血をもって約束してくださっている将来です。私どもは、時に偽り者となります。偽るつもりではなくても、そうなることがある。しかし、イエス・キリストは、真実なお方。約束を違えることはありません。

ですから、私どもの将来は、この礼拝で、聖餐式で先取りされる将来です。どんなに深い罪も、主イエスの父なる神のみもとにひれ伏し、これを告白し赦しを乞えば、その罪から解放される。神の子としての命を与えられる、そして、私ども一人一人を深く愛するイエス・キリストは、輝く笑顔で私どもを宴の席につかせてくださいます。このお方と共に喜ぶ祝いの食卓。永遠の日曜日。それが私どもの将来です。必ずやってくるその日を目指して、今の闇がどんなに暗くとも、教会の仲間と共に歩んで行きたいと心から願います。